

オモチャ屋さん
～番外編～



設定

男をラバースーツに包まれた言いなりのオモチャに変えてしまうオモチャ屋のお話です。オモチャにされた人間の動きを停止させる、電流を流す、位置を追跡することができるチップが出てきたりと、少し SF 要素もあります。

『オモチャ屋さん』1～2ではノンケ消防士角田晃を主人公としていましたが、番外編ではその先輩高橋直輝を主人公としています。オモチャ屋での調教は回想にとどめ、城田の家に到着してからの話がメインです。晃は登場しません。

登場人物

城田 雄三(しろた ゆうぞう) 50 歳 消防士(歴 25 年)

「怒鳴るのは愛情」「部下は従って当然」という価値観をもつ。

高橋 直輝(たかはし なおき) 35 歳 消防士(歴 13 年)

仕事ができ、後輩からの信頼が厚い。

倉林 裕二(くらばやし ゆうじ) 43 歳 消防士(歴 19 年)

大人しい。城田に付き従っている。高橋へセクハラしている。

角田 晃(つのだ あきら) 26 歳 消防士(歴 4 年目)

真面目で責任感が強い。『オモチャ屋』1～2で、オモチャ屋でラバースーツのオモチャに調教された後、依頼主の城田のオモチャになった。

(※登場人物の年齢は「オモチャ屋さん」1～2の年齢です。番外編はその5年ほど前を主な舞台としています。)

火種

朝の詰所には、コーヒーの匂いが漂っていた。壁のホワイトボードには出勤予定が無機質な文字で並び、誰もが慣れた手つきで装備を点検している。

朝から空気が重い。

「返事が小さい！」

城田の声は、天井の梁に反射して詰所全体に落ちる。そこに含まれるのは指導というより、支配に近い。彼にとって怒鳴ることが愛情で、従わせることが教育だった。

直輝は、工具箱の蓋を閉めながら城田を見た。直輝は現場での判断が早く、後輩からの信頼も厚い。

城田が異動してきてからというもの、詰所の空気は目に見えない何かを含んでしまっている。

「今のは注意で済む話です。声を荒げる必要はありません。」

淡々とした口調で言うと、城田の眉がわずかに動く。

「俺のやり方に口出すな。現場は命がかかっている。」

「だからです。命がかかっているから、冷静であるべきだ。」

二人の間に、ぴんと張った糸が生まれる。

そこへ、倉林が無言で割って入るように立った。城田が異動してきたからというもの、いつも城田の半歩後ろにいる。城田の言葉を復唱するでもなく、ただ頷き城田に同調している。

倉林の視線は、なぜか高橋から離れない、、、。

沈黙となり、直輝はその場を離れるため歩き出す。倉林と通路をすれ違う際、さりげなく距離を詰め、軽い接触を装って手が高橋の尻に伸びてくる。高橋は一瞬だけ肩を強ばらせ、身を引いた。

「やめてください。職場です。」

短く、はっきり。何度も倉林に対して繰り返してきた言葉だ。

倉林は苦笑いを浮かべ、何事もなかったように去っていく。城田は何も言わない。

三人は同じ制服を着て、同じ仕事に向かう。だが、その足並みの裏で、静かな火種を抱えていた、、、。

改造

珍しく城田が怒鳴らずに一日を終えた日、帰り際に直輝に飲み物を渡してきた。何かいいことでもあったのか、どういう風のふきまわしだろうと思いながらも感謝し、受け取った。相手が理不尽なことをしないのであれば、そう邪険にする必要もない。

その飲み物を飲みながら、彼女とメッセージのやり取りをしながら寮でくつろいでいると、急な眠気に襲われる。

そして、気づいた時には見知らぬ場所で拘束されてしまっていた、。

見知らぬ場所、見知らぬ男に薬を打たれ、敏感になった体を蹂躪された。ラバーズーツというものを着せられ、「お前はオモチャになるんだ。」と異常な言葉を何度もなげかけられた。

男との行為も、そのラバーズーツも最初は嫌悪しかなかったが、次第に自分が好きなものの領域へと吸収されていく。

バイブ責め、亀頭責め、連続強制射精、鞭打ち、、、今まで経験したことのない快楽と苦痛のはざままで自身を失っていく。男の一物を上下の口でくわえているのに勃起がおさまらなくなっていく。自分がなくなっていくようでとても怖かった。

寝るときでさえも、媚薬入りのウォーターベッドに入り、「ご主人様、、私を改造してくださり、、ありがとうございます、、。」と呪文のように唱え続けなければならなかった。

ラバーズーツが張り付く感触、体の一部となっていく感触にうっとりしてしまうようになった。

その頃には別の部屋に移され、同じような男たちとの共同生活が始まった。筋トレ、フェラトレーニング、小便飯、、、お風呂でさえ巨大な食洗器のようなもので洗われ、排便ですら大勢に見られながらする、、人間としての自覚を削られていった。

自分の購入者がいるらしく、その人のもとへ行くための最後の仕上げとして、乳首にはピアス、また肩からチップを埋め込まれ、s-03 という製造番号を首の後ろに焼き付けられた。

自分が何も知らない間に、、、電源をオフにされている間に、、、スタッフたちに肉体をもてあそばれた。こんなことが現実にあるわけない、、そう思いながら、圧縮袋のような袋にいれられ、空気をぬかれると、そのまま箱にいれられた。箱に入っていた時のことは覚えていないが、光を待ち望んでいた気がする、、、。